

令和2年度 山梨県立吉田高等学校 学校評価報告書(自己評価・学校関係者評価)

山梨県立吉田高等学校 校長 古屋 勇人

学校目標・経営方針	Yoshida PRIDE を持って未来を生き抜くことができる生徒を育成する		
本年度の重点目標	1 生徒の知識活用能力を高める	達成度	A ほぼ達成できた。(8割以上)
	2 生徒の主体性を高める		B 概ね達成できた。(6割以上)
	3 生徒の社会性を養う		C 不十分である。(4割以上)
			D 達成できなかった。(4割以下)

評価	4 良くできている。
	3 できている。
	2 あまりできていない。
	1 できていない。

自己評価			
本年度の重点目標			令和2年度末評価(2月8日現在)
番号	評価項目	具体的方策	方策の評価指標
1	生徒の知識活用能力を高める	※1 吉田高校グラデュエーション・ポリシーを意識し、生徒の主体性をさらに育成する授業を実施する。	外部アンケート等
		評価を適切に行い、生徒の自己効用感、自己肯定感の高揚を図る。	外部アンケート等
		授業と連動した課題を設定し、知識の活用・定着を図る。	外部アンケート等
		<p>自己評価結果</p> <p>達成度</p> <p>成果と次年度への課題・改善策</p>	
		<p>・8割を超える教職員が、「生徒が主体的に参加する授業を実施している」と回答し、すべての学年において、8割を超える生徒がそのような授業が行われていると回答していることを照らし合わせてみると、おおむねこの評価項目に対する達成状況は良好である。しかし、「授業で感じた疑問を自ら調べようとしている」生徒の割合が、2学年で一旦低下していることは、生徒への指導方法について改善の必要性があることを示している。</p> <p>・生徒評価を適切に行っているかについて、教員の回答は93.6%と高い数字となっている。また、授業を楽しんでいると感じている生徒については1・3年生では80%以上が楽しいと感じているが、2年生でおよそ60%と低くなっており、過年度比較でも達成率が10%低下している。感染症拡大の中で対面型協働型の授業形態が限定されている結果と分析している。GPに関する保護者の理解について8つの力も過年度比較で達成度が上昇している。保護者による生徒の自己肯定感の評価は全体として84.8%と高い評価を得ている。</p> <p>・すべての教員が授業改善に努めており、評価も適切に行われていると言える。GPの評価から、生徒も自分自身の成長を実感しており、多くの保護者がそのことを感じている。現状では、2年生における学習意欲の向上のために疑問を自ら調べようとする態度を育み指導と評価方法の工夫を行っている。特に令和4年度の新学習指導要領の年次進行に合わせた観点別評価の見直しに取り組む。また、今後は単元の内容や習熟の度合いなどの再検証をはかりながら、さらなる指導内容、評価方法の改善を行う。</p> <p>・本校では学校で授業に見通しを立てたり振り返り、発展的学習に取り組ませるための家庭学習との接続を意識した計画を立てている。生徒の自己評価と保護者による評価について検証・考察し、家庭と密接に連携して生徒に計画的な学習をさせる環境づくりに取り組む。</p> <p>また、計画的な学習をしていることを保護者に対して可視化できる保護者への情報伝達の方法を考え、行う。</p>	

学校関係者評価	
実施日 (令和3年2月16日)	
評価	意見・要望等
4	<p>・授業については、全体として達成率が高く、生徒・教職員が高い意識をもって、取り組んでいることがとても評価できる。</p> <p>・生徒が自ら課題を見つけ、将来のビジョンへ結びつけられるように各教科の授業や教科横断的な教育課程の改善等、生きる力の育成やカリキュラム・マネジメントに取り組んでおり、生徒・保護者からのアンケートからもその成果が感じられる。</p> <p>・見通しを立てた授業の振り返り、発展的な学習に取り組むための家庭学習との接続等、アンケートでの振り返りや検証・考察を丁寧に行い、さらなる改善に取り組もうとしていることが好結果につながっていると思う。</p> <p>・コロナ禍のもとで学校生活が様々な制限・制約を受けたはずだが、それを感じさせないような結果であると思う。</p> <p>・「授業の楽しさ」については、1学年と3学年は高い達成率となっていて非常に良いと思うが、2学年で他の学年よりも20ポイント低い60%となっていることが気になる。「自己評価」において「感染症拡大の中で対面型協働型の授業形態が限定されている結果」と分析しているが、そうであるならば、他の学年でも低くなるはずなので、他の原因があるかと思う。メモや付箋の共有、ノートの見せ合い等の工夫を行い、自他の考えを交流させる方法があるので、協働型の授業形態を継続させてほしい。いずれにせよ、2学年の達成度が低い原因を究明していくべきである。</p>

自己評価						
本年度の重点目標			令和2年度末評価(2月8日現在)			
番号	評価項目	具体的方策	方策の評価指標			
		自己評価結果	達成度			
		成果と次年度への課題・改善策				
2	生徒の主体性を高める	常に「分析し、思考し、創造し、発信する」機会の提供を意識した指導を行う。	外部アンケート等	A	<ul style="list-style-type: none"> ・当面は同じような社会状況であると考えられることから、授業はもちろん、新しい生活スタイルを踏まえて、行事に関しても出来ることを考え、効果的な教育活動を実施していく。 ・左の2番目の項目に対して、達成できていない生徒への指導が必要である。そのためには、生活規律、学習規律を確保し、声掛け、授業内容、指導方法を工夫することで生徒が「身の回りの課題」に注意が「向く指導を行う。 ・コロナ禍で行動が制限されている中で行動力について高い達成率が得られた。自らの言動による責任感については吉高GP8つの力(傾聴力・思考力・想像力など)全体が大きいかかわってくるので、今後も生徒が主体的に取り組むように教員からの指導を工夫し、継続する。 	
		身の回りに存在する課題を発見し、他者との関係の中で「傾聴し、想像を共有し、行動する」ことができる生徒像を意識した指導を行う。	外部アンケート等			<ul style="list-style-type: none"> ・生徒アンケートの中の「身の回りに存在する課題に対して意欲的に行動している」項目における評価が高く、過年度からの経年比較を見ても、生徒の主体性が高まっていると評価できる。
		自分の言動に責任を持ち、自ら行動する態度を養う。	外部アンケート等			<ul style="list-style-type: none"> ・生徒アンケートの中の「身の回りに存在する課題に対して意欲的に行動している」項目における評価は高く、又過年度からの経年比較を見ても、生徒の主体性が高まっていると評価できる。想像力(結果を考えて想像する力)の育成について保護者からも昨年度を上回る達成率の評価を得ている。
3	生徒の社会性を養う	周囲との関わりの中で、自己有用感を養う。	外部アンケート等	B	<ul style="list-style-type: none"> ・「富士山学」において緊急事態宣言が解除されている期間に商工会青年部の皆さんなどが来校してくださり様々な課題を学ぶことができた。来年度は本年度の経験をもとに様々な事態に対応しながら「富士山学」、理数科の「課題研究」「研究所訪問」などの校外学習が実施できるようにする。 ・富士山学について学ぶ中で、地域社会との関わりを調べたり意識している生徒は多い。また、福祉講話でフードドライブ活動について知り、また活動に参加することにより、社会との関わりについて意識することができたと推察できる。よって社会との関わりを常に意識させる指導を明確に行い、生徒会活動では部単位でのボランティア活動もさらに充実させていく。 ・生徒・職員へのSDGsへの取り組みは、臨時休業終了後の授業等において、全校的な啓発活動が充実した結果が高くなった。保護者については、民間クラウドサービス「Classi」やHPなどを活用した啓発活動をさらに活性化させることが達成率を高くすることにつながるのではないかと思います。今後もSDGsの取り組みを通して、生徒の地域を越えた地球規模の課題にも関心を向けさせ、さらに社会の一員としてボランティア精神を養い、これらの教育活動についての保護者への理解にも力を注ぐ。 	
		社会に関心を持ち、未来の社会について考える態度を養う。	外部アンケート等			<ul style="list-style-type: none"> ・「地域の人々との関わりについて」の達成率が1、2年生において昨年度比率は向上しているものの、5～6割程度と低い結果となった。例年であると「富士山学」や理数科の「課題研究」において地域に出て住民の方や大学、研究機関とふれあいを重ねていくのだが、本年度はコロナ禍の影響で計画通りにいかなかったことも一因と考えられる。
		ユネスコスクールへの加盟申請を契機とし、SDGsを意識させるとともに、ボランティア精神を養う。	外部アンケート等			<ul style="list-style-type: none"> ・生徒は、地域社会との関わりについての自己評価は、平均6割程度と、やや低い結果になっている。実際には、富士山学や、フードドライブ、ボランティアへの参加などを通して、社会との関わりを意識しないながらも、地域などの社会との関わりはあると考えている。 ・生徒・職員については、例年と比べて達成率が大きく向上しているのが今年の特徴である。保護者については、達成率が8割に達していない。

※1) 吉田高校グラデュエーション・ポリシー(吉高GP)・・・本校3年間を通して8つの力(自己肯定力・傾聴力・分析力・思考力・発信力・想像力・創造力・行動力)を身につけること。

学校関係者評価	
実施日(令和3年2月16日)	
評価	意見・要望等
4	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の言動に責任を持つという点で生徒の自己評価が全ての学年において高く、真面目で粘り強く物事に取り組む姿勢が表れている。一方、責任感が高いゆえのストレスをため込んでいないかが気になる。百折不撓の精神で乗り越えることを期待するが、コロナ禍において例年よりも、我慢することや対策を強いられる中、是非、生徒がストレスを発散できるような対策などを期待したい。 ・生徒の概ね9割が「主体的に行動できている」と評価しているが、教職員は6～7割と低く捉えている。この差は何であるのかを分析し、主観的評価と客観的評価の差を縮めていく努力を求める。 ・吉田高校の歴史や伝統によって、コロナ禍によって限られた条件の中での活動となってしまったが、出来ることを工夫して取り組んだことによって、生徒の主体性を育むことができていると、生徒や保護者のアンケートから感じとれる。今まで取り組んできたことが活かされていると思う。 ・保護者の評価で学習時間、睡眠時間、時間の有効活用について、生徒の評価との差があるので、生徒に対する「時間管理に対する指導」の改善が必要である。 ・吉高GPによって、生徒は主体性を高めることができているのではないかと思う。
3	<ul style="list-style-type: none"> ・学校生活をこなしながら「地域の人々との関わりを持つ時間」を工夫することはとても難しい。また、コロナ禍によって、地域活動に参加することも難しい。そのような状況を考慮すると、「地域の話題や課題など意識して生活する」という意識を持たせる指導で十分であると思う。その一方で「以前よりボランティアについて意識し、行動するようになった」は7月と比較してもすべての学年において1割程度アップしており、コロナ禍においてよりボランティアを身近に感じ意識したのではないかと推測できるので、「社会性」は少しずつ育成できているのではないかと思う。 ・「富士山学」「課題研究」「研究所訪問」等、コロナ禍でも地域とのつながりを教育活動の中で維持できていることは、今までの取組の成果や財産が大切にされている証であると思う。普段から「地域」の中で活動しているということを指導することによって、評価は改善されていくと思う。 ・「地域の人々との関わり」に関しての評価が、昨年度と同様に低い達成率となっている。コミュニティ・スクールの設置にもない、この点はますます重要なテーマになると思うので、「次年度への課題・改善策」に書かれていることは確実だと思う。来年度は改善できるように一層努力してほしい。